

特集 医工連携への積極的な取り組み

—臨床工学技士に期待される役割とは—



編集責任

滋慶医療科学大学院大学

加納 隆 KANO, Takashi

筆者は大学の工学部を卒業してから、縁あって都内の病院に就職した。まったく異例のことであったが、卒業研究でお世話になった先生が、その当時、超音波の医学応用などのMEについての研究開発を行っていたことがこの道に入るきっかけとなった。医療機器メーカーに就職する先輩・後輩はいても、病院に就職する者は皆無に近かったし、いまだに工学部と医療現場の距離は遠いといわざるを得ない。しかし、臨床工学技士が誕生して、その間の橋渡しになる人材が登場したといえるのではないかと考えている。

従来から、新たな医療機器を開発する場合、医師と工学者が協力・連携して行っていたが、必ずしも十分な意思疎通ができていたとは限らないと思う。医師からのニーズは医療におけるニーズを代表していることは確かであるが、実現性、経済性、安全性、市場性などの実際的な問題、それも特に臨床工学的な知見については、必ずしも的確とはいえなかったのではなかろうかと思う。この両者の間に入って、通訳的な役割を果たせるのが臨床工学技士ではないかと考えている。

また、医工連携・産学連携といわれるようになって久しいが、過去においては、こういった連携が必ずしも製品化までつながっていたわけではないことも、また事実である。それは何故であろうかと考えたときに思い当たるのは、医療現場(医)と開発企

業(工)との医工連携に際して適切なコーディネータがいたかということである。この、いわば「医工連携コーディネータ」は、医療現場に精通し、なおかつ医療関連製品開発企業の担当者に現場ニーズを的確に伝えることができなくてはならない。具体的には、医学だけでなく工学的なセンスを併せもつ医師や、臨床に深く携わりつつ製品開発・改良にも意欲のある臨床工学技士などが考えられる。

ところで、新たな医療技術・医療機器をゼロから創出するというのは容易なことではないが、すでにある医療機器を改良してより安全性・信頼性の高いものにすることや、医療分野以外の今ある技術をうまく導入・連携させることで、すばらしい製品を生み出すことは可能である。

筆者が知る社会学者が、医療機器の安全対策に関して、「人のせいにするな、物のせいにせよ」と言ったが、これは至言である。つまりこれは、人の注意力に頼るのではなく、創意工夫でより安全性の高い製品を開発すべきだということを示唆している。今回の特集では、医工連携の考え方、(公社)日本臨床工学技士会で進める臨・学・産連携、ならびに臨床工学技士による実際の取り組み事例を紹介していただいた。今後、多くの臨床工学技士発の医工連携製品が開発されることを大いに期待するとともに、本特集がそのきっかけになれば幸いである。